アラジンのランプの大男

「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）の顔だった小田実（まこと）さんが2007年7月30日に逝った。 この新聞記事を読んだとき、思わず目は遠くの宙を見た。……ほんとに“今は昔”になってしまっていた。「ベ平連」もすっかり死語になっている。その頃はベトナムが南北に分割され、南はアメリカで、北はソビエトの代理戦争をやっていた。歴史では北が勝利をしてベトナムは統一されたのだが……。

小田実の原点は大阪空襲の体験なのだろう。爆弾の雨のなかを逃げまどい、震えながら黒こげの死体を片付けたという。だから米軍の北爆の写真をみて『殺される側の論理』（本多勝一が著わしたベトナム戦争に関する本）ということが何も言わずにすぐに解ったのだろう。その北爆の煙の下で実際に起きていることを具体的にイメージできたのだと思う。

ともに「ベ平連」をつくった哲学者の鶴見俊輔さんは、小田さんをよく知らないまま運動に呼び込んでしまったのだという。

「たまたま拾ったビンから煙がもくもく出てきて、アラジンのランプみたいに巨人が現れた」

と印象的なフレーズで出会いを回想している。彼が並はずれた実行力で運動を広げていってくれたからだ。 あの“知の巨人”の鶴見俊輔にこうまで言わせてしまうのだな、このランプの大男は……。 いいなァ。

大阪空襲の体験に加えて、もうひとつ彼を支え続けたのは、彼自身のデビューの本『何でもみてやろう』（1961年初版、定価290円！）に現れているシュロ縄のように強靭なくせにきらきらとした感性に裏打ちされた知見と洞察ではなかったかな、と思っている。 この本の内容は彼が23、24歳のころに「フルブライト交換留学生」で行ったときの体験を28、29歳の時点でまとめたもの。 その当時は、1ドル＝360円などという時代で、その上、日本から持ち出すドルは500ドルくらいに制限されていた。 つまり、一般庶民が外国に行くことは「夢のまた夢」で、このフルブライトだけが若い学生に一筋の燭光を与えていたのであった。 今ならさしずめ、宇宙旅行に行くよりも遠い存在だったかもしれない「異国」への旅行記であった。

しかし、これはノーテンキな旅行ガイドブックの類ではない。後半のヨーロッパ以降は航空券だけを握った一日一ドルの超貧乏旅行になる。その下世話とは別に、章ひとつひとつが文明批評であったり、文化比較論になったり、文化人類学になったり、極めて濃密な考現学であった。20代の若者がしたためたにしては、ある意味老成したインテリジェンスを感じるものであったし、途方もなくばかでかい好奇心が多くの若者を痺れさせたものであった。作家・沢木耕太郎もこれを「不滅の紀行」と賞賛している。

そんな本をたまたま本屋の本棚から引き抜いてしまったのだ。そうしたら、途端にもくもくと煙が出て、そのなかから“何でも見てやろう”“なんとかなるさ”と呟く筋肉もりもりの大男が出てきてしまった。そのマッチョに随分と長い間（つい最近まで）首根っこを掴まれて強引に引きずり回されてきたなァと深々と思う。

というのも、それらの記述は、当時の二十歳そこそこの若者にとってみれば劇薬のように刺激的で媚薬のように蠱惑的であった。“よーし、いつかオレも〈異国〉に行って何でもみてやるぞ”と興奮で発熱した脳みそで誓った。そのことが私の行動様式のそれからを決定していったのかも知れないと今更に思う。最近、あるアプリのマップに自分の訪問したところをクリックしての結果を見て、少なからず驚いた。２８ヶ国・61都市となっていた。もちろん、世界にはまだまだ広いが、日本人の旅の平均とすれば少なくはないはずだ。これはやっぱり、“アラジンのランプの大男”の手のひらで踊ってきたのかな？って思う次第。

そんなこともあり、“自分の生涯での＜一冊の本＞を挙げろ”と言われれば、この『何でもみてやろう』が有力候補の一冊になるかと思う。 だからなんだろう、色がすっかり褪せても本棚の奥に鎮座している。仏壇の奥に置いてある経文、もしくは引き出しの奥のバイブルのように……いつも手元にありつづけるのだろう。

1711文字：